

## メッセージアウトライン ヨハネ11：45～57「なぜ信じないのか」

イエスは死んで四日もたっていたラザロを死よりみがえらせた。この奇蹟を見た多くのユダヤ人はイエスを信じた。(45) しかし幾人かの者はイエスに反対する立場のパリサイ人たちのところに行って、そのことを報告した。(46) ラザロの死よりの復活のことを聞いて祭司長とパリサイ人たちは議会を召集した。(47)彼らはイエスを救い主と信じなかったのである。議会において彼らはいらだち、「このまま放っておくなら、すべての人があの人を信じるようになる。そうなると、ローマ人がやって来て、われわれの土地も国民も奪い取ることになる」(48)と言った。彼らの言っていることは、このままにしておいてイエスが民衆の人気を集め、人々が皆イエスを信じるようになるならば、イエスを指導者にまつり上げて暴動でも起こるかもしれない。そうなるとこの国はローマ帝国の支配の下にあるのだから、ローマ人の干渉を受け、それまで与えられていた自由と特権を奪い取られてしまう。土地も国民も……という意味である。彼らはイエスが真の救い主か否か、またその語る場所が真理であるか否かを探求するよりも、自分たちの宗教的特権と政治的特権を維持することができるかどうかということに関心があったのである。これこそ罪の性質の現れである。

その時議長であった大祭司カヤパが一つの提案をする。(49~50) 彼は、このさい自分たちの利益を守り、国民全体が滅びを免れるためにも、イエスを殺してしまったほうがよいと言っているのである。しかし、神は彼の無礼なことばを用いながら非常に大切な預言をさせておられたのである。それはイエスはただユダヤ国民のためだけではなく、世界に散らされている神の子たち、選びの民を救い、一つに集めるためにも死のうとしておられるのだということである。(51~52)神はカヤパを用いて、イエスの身代わりの死、贖罪の死の預言をなされている。そしてそれは救われた者たちが一つとなり、一つの教会を形成するためなのである。

大祭司カヤパの提案を受けて議会のメンバーはイエスを殺すための計画を立てた。(53) イエスがラザロを死からよみがえらせた結果、ユダヤ人たちに二つの反応が起きた。一つはイエスを信じること、もう一つはイエスを殺そうとしたことである。この二つは全く相反する。それゆえ、すばらしい奇蹟を見れば人々は皆信じるといことは絶対にない。イエスが福音のみことばを語られ、神の子としての力あるわざを行われてもなお信ぜず、自分たちの利益、立場を守るために無視し、あるいは殺意を抱くということがありうるのである。そしてそれはいつの時代でもそうである。しかし、先に信じ救われる恵みにあずかった私たちは、この国を愛し、隣人を愛して、忍耐強く、祈りをもってイエス・キリストの福音のすばらしさを証しし宣べ伝えていく必要がある。主は欠けだらけの弱い私たちを用いてこの世に救いを示されるのである。

私たちもこの世の提供する華やかなもの、面白いもの、富や権力、名誉といったものに心を奪われて、いつの間にか骨抜きだけのクリスチャンとなり、最後に主の前に立った時に厳しく裁かれ滅びに行くような者とならないようにしっかりと信仰を働かせ、私たちの信仰の創始者であり完成者であるイエス・キリストを見上げつつ歩んでいく者になりたい。→ヘブル12:1~3